

結核発症リスクを区別

福医大 安田医師らチーム発見

福医大総合内科・臨床感染症学講座講師の安田一行医師(40)らの研究チームは、血液中の免疫反応を示す物質などを用い、患者が結核を発症するリスクを区別できる可能性のある検査手法を発見した。安田医師は「研究成果は結核の根絶につながる新たな検査法の礎となる」としている。福医大が1日発表した。



安田一行氏

安田医師によると、結核感染者は無症状で他人に感染させない「潜在性」と、症状があり他人に感染を広げる「活動性」に分けられ

る。研究チームは、長崎大や新潟大、東京大などの研究者と共にフィリピンの結核患者と家族ら約80人を対象に調査した。休眠状態の結核菌が作り出す物質「M D P ー 1」で血液を刺激し、免疫反応を示す物質「インターフェロンガンマ」の量

を測定した結果、活動性の感染者は数値が低い傾向が見られたという。

研究成果は4月10日にスイスの科学誌に掲載された。安田医師は「実用化され、活動性になり得る患者を事前に見つけて治療できるようにになれば感染拡大を防げる」とし、「今後は経年変化を踏まえた実証を進めたい」と語った。

結核は世界で年間約1千万人が発症し、約150万人が命を落としている。県内では昨年、123人の感染が確認された。